
Digimon Tamers -again-

餡子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i g i m o n T a m e r s — a g a i n —

【Nコード】

N 8 7 9 6 0

【作者名】

餡子

【あらすじ】

再開したティマーとデジモン。喜びを分かち合う間もなく現れた敵。新しい仲間。明かされる秘密。そして、『僕らだけの』冒険が始まる。———大丈夫、君となら何処までも行ける。だから、一緒に前に進もう——— ※オリキャラ出ます。ベルゼブモン

最良気味

1 く始まりのサインく(前書き)

全て私の妄想から出来ています。最初はト書きですが後から直します。

1 く始まりのサインく

side…李 健良

みんなが、デジモンが、テリアモンが。

元の世界——つまり、デジモンワールドへ帰ってから3カ月。

僕は、小学6年生になっていた。

それは今、受話器で繋がっている相手にも言える事で。

「ジェンっ！ たた、大変なんだ！ とにかく今すぐ、ギルモンハウスに来て！」

叫ぶような声で用件を言った後、啓人からの電話は切れた。

まだキンキンしている耳をそのままに、僕はがちゃりと受話器を置いた。

…ギルモンハウス。

それはつまり、あのコンクリートで出来た小屋？ の事を言うんだらう。

「おにーちゃん、どっか行くの？」

「うん、ちよつとね」

そう小春に答えながら、玄関で靴を履く。

「じゃ、行ってくるから」

「…はーい、いってらっしゃーい」

少しつまらなそうな顔をしながらも見送ってくれる妹に、僕はひらひらと手を振って、ドアを閉めた。

太陽がほとんど落ちた夕方、紺色で埋め尽くされた空。その中を自転車漕いで、ギルモンハウスに向かう。するとあと少しのところで、後ろから声が聞こえた。

「久しぶりっ！」

「瑠姫！君も呼ばれたの？」

ここまで全速力で漕いできたらしい瑠姫は、スピードを緩めて僕と並走する。

彼女を久々に見たと思うのは、きっと気のせいじゃない。

僕達と瑠姫は、デジモンで繋がっていた。

だから、テリアモン達が向こうの世界に帰って、瑠姫とは急に疎遠になった。

もちろん繋がりが完全に消えたわけじゃなく、連絡を取り合ったりはしていたけど。

学校が違うからというのが、大きい理由だろう…遊ぶことは少なくなっていた。

「そんな感じ。あと、こいつらもね」

瑠姫が後ろを振り返り、くいつと顎で指し示す。

その先には、少し遅れ気味な二人…博和と健太が。

「ま、待ってくれよ…」

「置いてくなんて酷いじゃないかあ」

「アンタらが遅すぎるのよ！」

まるでコントのようなやり取りを繰り返す3人。

変わってないなあと、僕は少し苦笑いする。

「博和に健太も…ってことは」

「デジモンのことだろうね、きつと」

「テイマー大集合だな…まさか遼さんもいるのかあ!？」

健太がそう言うのと、にわかに沸き立つ博和。

「あの”さわやか光線”が!？」

と、さも嫌そうな顔をする瑠姫。

真逆の反応に、健太は一度目、僕は二度目の苦笑をした。

1 〽始まりのサイン〽（後書き）

1話ですー…書くのに時間かかりすぎorz（1時間半ぐらい）
そして啓人の出番ないじゃん。今気付いた…
序章の序章の序章、て感じですので、デジモンはまだ出て来ません
では、明日にでも更新出来ればいいなあ

2 〽見つけたのは〽

side…松田 啓人

ジェン「啓人ー！」

啓人「みんな！」

振り向いて手を振る。

こちらに走ってくるのは、仲間であるみんな。

ジェン、瑠姫、博和、健太だ。

…あれ？

啓人「久しぶり、瑠姫。…ねえ、加藤さんは？」

瑠姫「そうね。あ、樹莉なら、もうすぐ来ると思うけど…」

そっか、と安心して溜息を吐いた。

来ないのかと思ってしまった。

だって彼女は、デジモンワールドで――

博和「なあ啓人おー、遼さんは？」

啓人「九州にいるから、呼べなかったんだよ」

瑠姫「…ま、それもそうよね」

一気にテンションダウンする博和と、どこか嬉しそうな瑠姫。
苦笑しながらその様子を眺めていると、向こうから人影が走ってきた。

樹莉「ごめんなさい、遅れちゃって…」

ジェン「気にしないでいいよ、僕らも今来たところだし」

申し訳なさそうな顔をする加藤さんに、ジェンがすかさずフォローを入れる。

みんなが揃った所で、健太に質問された。

健太「ところで啓人、どうして僕らを集めたの？」

啓人「それが…ついて来て！」

先に立って歩き、ギルモンホームへ向かう。

あらかじめ開いていた扉から中に入り、奥へ向かって進んだ。

瑠姫「何があるっていうのよ？こんな所に…」

ジェン「啓人…まさか!？」

啓人「うん、ジェンが考えてる通りだよ…ほら」

奥まで来た所で、ある一角を指さす。

瑠姫「そんな…これって!？」

そこには――前に使ったデジタルワールドへの入り口が、光り輝いていた。

樹莉「残ってたのね…」

啓人「うん…僕もさっき見つけたんだ」

これでまた、デジタルワールドへ行ける。

それが嬉しくて仕方なかった。

だって、またデジモンと――ギルモンと会えるんだから。

健太「…よし！じゃあさっそく——」駄目だよ」ジェン！？」

今すぐにでも、と意気込む健太の言葉を冷静に否定するジェン。

博和「ジェンは会いたくないのかよ！？」

ジェン「そうじゃない！　まずは親に伝えないと、また心配するだろ」

そうだ。

少なくとも山木さんには伝えないと、帰る方法が分からなくなってしまふ。

博和「…分かったよ」

しぶしぶ、という感じで頷く博和。

瑠姫「じゃあ、取りあえず一旦帰るわよ」

樹莉「あれ？これ…」

瑠姫に促されたみんなの足が出口へと向いた時。

加藤さんが、デジタルワールドの入り口の近くへと手を伸ばした。
その時——

樹莉「つきゃあ！？」

強い光が入り口から迸り、辺り全体を包み込んだ。

白が辺りを埋め尽くし、僕たちの影がより一層濃くなる。

ジェン「何なんだこれ…っ！？」

光があまりに眩しくて、僕は目を閉じた。
同時に、頭の中がぼんやりとした。

啓人「あ…」

薄れゆく意識の中、どこかで微かに、声がした。

2 く見つけたのはく (後書き)

相変わらず書くのが遅い…なあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8796o/>

Digimon Tamers -again-

2010年11月14日02時30分発行